

柳川市の概要



柳川市は福岡県南部、筑後平野の西南部で有明海に面しており、江戸時代には立花藩12万石の城下町として栄えた歴史を持つ、人口7万4422人、面積76.90km²（2007年7月末現在）の自治体である。市内には、江戸時代から残された総延長約470kmにおよぶ堀割が網の目のように張り巡らされており、その歴史遺産を活かした独自の水郷景観を形成していることで全国的に有名である。

柳川は有明海の低湿地で水はけの悪い土地を灌漑のために耕地に堀が引かれたことが堀割の起源と言われている。その後、1601年に柳川に封入した田中吉政の治水利水事業により独特な水利システムをもつ堀割が形成された。堀割は、灌漑、排水路だけでなく、生活用水の供給や交通の機能をも担い、武士・農民・町民を問わず、無くてはならない生活基盤となっていた。

1960年代以降、柳川市では上水道の整備が進むに従い、堀割に生活污水が流されるようになり、水環境の悪化が進行する。1977年、水質悪化を理由に堀割の埋立て計画が持ち上がったが、住民による反対運動と清掃活動によって埋め立てが防がれた。この頃の堀割を巡る問題は、堀割の歴史的価値を再認識させると共に、堀割保全のための景観形成事業が行われる契機となった。

市では1971年以降、柳川市伝統美観保存条例、柳川市用排水路管理条例、柳川市石鹸使用推進要綱、柳川市クリーン条例が制定され、これらの諸条例とまちづくり事業によって水路周辺の景観形成が図られた。また、1999年には『柳川市堀割を守り育てる条例（水の憲法）』が制定され、体系的な取り組みが行われている。



江戸時代の柳川城下



昭和25年の柳川



現在の柳川

課題対象地区と柳川市のまちづくり

本ワークショップの課題対象は、旧柳川城下一帯で、城を中心に武家屋敷が並んでいた城内地区と、町家や下級武家屋敷、寺社が混在した柳河地区、それに漁師町、舟溜りからなる沖ノ端地区の3つを含む範囲。

現在、柳川市は、2005年3月に隣接していた旧三橋町・大和町と合併し、新たな都市づくり、まちづくりの局面を迎えている。モータリゼーションの浸透、ライフスタイルの変化により、全国の地方都市と同様、柳川の都市景観も、高層マンションの立地、中心商業地の空洞化、敷地の細分化、沿道広告物の氾濫等々、かつての城下町の姿からは随分と変容している。

そうした課題に対応すべく、市では2005年施行の建



築指導条例により建物高さ制限(16m以下)や色調への配慮などの誘導を図り、2005・06年には国（文化庁）のモデル調査「柳川市文化的景観保存活用計画作成調査」の実施、2006・07年にかけて都市計画マスタープランの策定、2007年景観行政団体になり景観計画の策定着手を予定している。

一方、柳川の堀割を流れる水は、一級河川の矢部川水系に属しており、柳川を含む流域一帯を対象にした広域景観計画の検討が福岡県と流域の市町村により進められている。単独市町村では解決できない広域景観への取組みとして注目され、と同時に、『水』が今後のまちづくり・都市計画の重要なキーワードであることを示唆する取組みとして期待されている。

2006日仏景観会議「柳川会議」アジェンダ

日仏景観会議は、日本の都市や地域の景観について、生活環境の整備、自然との調和と共生、伝統や美意識に基づく文化などの広域な問題を、フランスとの情報交流を行いながら、国際的な視野にたって議論することにより、広く景観に対する意識の向上を図るとともに、優れた景観の形成に寄与することを目的に、毎年、地方会議と東京会議が開催されている。

第8回目となった柳川会議では「堀割景観の創生～見直そう！水と人とまちの

関わり～」をテーマに、2006年11月4・5日の2日間で開催され、地元の方々をはじめ県内外の専門家・有識者が延べ752人参加し、最終日には、日仏景観会議「柳川会議」アジェンダ『柳川堀割景観創生への指針』を参加118名の署名とともに採択された。

その後、今年5月には市長へアジェンダを提出し、市の計画への反映を要請するとともに、地元市民活動団体を中心にアジェンダの具体化を模索している。



柳川における景観形成プロセス（提案）

